

わたしたちは苦難(苦しみ)や悲しみにはできるだけ遭いたくないものです。そして目の前に嫌なことが起こったりすると、何か悪いことをしたからだろうかと考えたりします。

日本にも「因果応報」や「罰が当たる」という言い方がありますが、聖書にも同じようなことが多く書かれています。旧約には民数記 14 章 1～38 節のように、人間の罪に怒った主が疫病に打たれます。

またイエス様の時代にも、目の見えない人を指して、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」(ヨハネ 9 章 2 節)と問う場面も出てきます。

しかし旧約のヨブ記には、神の下に正しく生きようとする人が苦難にあう場面も描かれます。そのことからしばしば、苦難は神さまがわたしたちを教育するための手段として捉えることもあります。

そしてイエス様は、苦難のしもべとして十字架に向かわれました。このときの苦難は、わたしたちの罪を赦すために必要なものでした。すなわちイエス様はご自身を、罪を贖ういけにえとしてささげられたという考えです。

イエス様を信じる人は、このイエス様の十字架にあずかることで、神さまの栄光のうちに入れられるのです。生きていく中で、様々な苦難が襲ってきます。しかし、必ず神さまがわたしたちを包み込んでくださることを信じ、歩んでいきたいと思えます。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(一コリント 10 章 13 節)

次回は「クリスマス」です。お楽しみに。



「ゴルゴダを背景にしたキリスト」

ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ

1696～1770 年

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。

(ローマの信徒への手紙 5 章 3～4 節)

